

ユニバーサルデザインを意識した 幼児教育や学校教育における授業の改善

—特別支援教育の視点を生かした工夫—

Improving lessons in early childhood education and school education
with an awareness of universal design :
Developing new techniques from the perspective of special education

松久 眞実

MATSUHIRA Manami

<要旨>

幼児教育や学校教育の現場では、発達障害を含めた支援の必要な子どもたちへの理解と共に、彼らが在籍する通常の学級運営や授業をどうするべきかという課題に大きな関心が寄せられている。通常の学級担任が、ユニバーサルデザインの視点を持つことによって子どもが変容することを、ビデオ映像を通して確かめ、今後の手だてに生かそうとする研修を実施した。

市町村教育委員会が実施する筆者担当の特別支援教育の研修会において、before ビデオ・after ビデオを視聴し、研修に出席した参加者にビデオ研修が効果的であったかどうかについて、質問紙調査を実施した結果をまとめた。通常の学級における障害のある子どもを含めたすべての子どもへの支援について、ユニバーサルデザインの視点から、学校や学級全体を見据えた研修方法を提案する。

キーワード：ユニバーサルデザイン ビデオ研修 支援の必要な子ども

1. 研究の背景

1-1 幼児教育や学校教育におけるユニバーサルデザインとは

幼児教育や学校教育の現場では、発達障害をはじめとする支援の必要な幼児児童生徒（以下子ども）が通常の学級で過ごしているが、近年その子どもに対する関わり方の困難さが大きな課題になっている。支援の必要な子どもたちへの理解と共に、彼らを含めた通常の学級運営や授業をどうするべきかという課題に大きな関心が寄せられている。

すべての子どもが通常の学級において適切な支援を受けるというインクルーシブ教育の流れは、特別支援教育に大きな変化をもたらした。そもそも特別支援学級が設置されていない幼稚園では、インクルーシブ教育を実践してきたと言っても過言ではない。支援の必要な子どもが混在する幼稚園・小中学校の学級において、どのように個別に寄り添いながら学級運営や授業を進めていくかについて、議論が続けられている。その答えを探るべく、ユニバーサルデザイ

ンを意識した学級集団をどのように構築していくかについて、論考したい。

従来は特別支援教育といえば個別な支援にスポットが当たりがちだったが、共生社会に向かう過程の中では、通常の学級で生きる力を育成することが重要ではないかという概念から、ユニバーサルデザインを意識した授業実践が注目を浴びている。ユニバーサルデザインとは、ロナウド・メイス（Ronald Mace, 1985）によれば、「すべての年齢や能力の人々に対し、可能な限り最大限に使いやすい製品や環境のデザイン」と定義されている。教育の場で使用する時は、一部の子ども向けのみではなく、すべての子どもにとってよい授業づくりであることに意図を込めて用いている。

佐藤・深澤（2010）は、子ども一人ひとりのニーズに応じた支援を可能にするには「通常学級の学級づくりと授業づくり、言い換えれば、通常学級とそこで行われる授業のユニバーサルデザイン化」が必要になってくると主張している。また山岡・宮崎（2008）も教員が発達障害のある子どもたちにわかりやすいように、いろいろな指導法を工夫したり、スモール・ステップで指導したりすると、LD等のある子どもたちだけでなく、「クラス全員にわかりやすい授業になる」と言及している。佐藤ら（2010）は、「発達障害のある子どもに『ないと困る』授業支援を徹底すればするほど、おのずとどの子にも『あると便利』な授業方策となる」と述べている。多様性のある一人ひとりに応じた支援は、結果として集団内のどの子にも『わかりやすい授業』となる。また一方、個々に応じた支援は、「一人ひとりの違いを認め合う仲間づくり」を形成し、「秩序があり、安心して過ごせるクラス」を進めることにつながると筆者は考え、提案してきた（高山・松久・米田, 2009）。多くの発達障害児が通常の学級に在籍していることを考えれば、集団の中での支援に焦点が当てられるべきである。つまり、学級内で個別に配慮することに加え、発達障害児を含む学級全体に対するアプローチが必要になってくると、筆者は考えている。

河村・武藤（2005）も特別支援教育の推進においては、従来教師がもっていた一斉指導のあり方、その方法論そのものを大きく問い直し、「一斉指導と個別対応を統合する新たな方法を作り上げていく必要がある」と述べている。また佐藤（2008）も学習面や行動面につまづきのある子どもたちが学級内でうまく過ごすためには、「個別な配慮・支援から学級・授業の在り方の検討へ」という発想の転換が必要であると論じている。

1-2 教師の専門性を高める研修の重要性

新しい教育の流れとして、2007（平成 19）年度に特別支援教育が法的に位置づけられた。それを受けて、各校園で校内委員会の設置や特別支援教育コーディネーターの指名などの体制が整備され、様々な障害のある子どもに対する理解も進んできた。

特別なニーズのある子どもの特性に応じた適切な配慮・支援を、クラス集団の中でどのように工夫していけばいいのだろうか、担任が悩んでいる現状の中で、教育機関におけるユニバーサルデザインの視点からの研修の重要性が述べられてきた。発達障害のある子どもの特性に

沿ったユニバーサルデザインを意識した研修では、これまでの実践と、先行研究による臨床的仮説として、以下の6つの視点が重要であると筆者は考えている。

1) 講義室の刺激を減らす：

「AD/HD（注意欠如多動症）の子どもたちは、様々な刺激が入るとより集中が困難になる」、「刺激の多い学校等の集団場面では、不注意、多動、衝動性などの症状がより激しく現れやすい」と鳥居（2009）が述べているように、発達障害のある子どもは、選択的注意が弱く刺激に反応して興奮しやすい傾向が見られる。確かに、子どものおしゃべりは別の子どものおしゃべりに伝播し、どんどん教室が騒がしくなることは少なくない。また、遅刻した子どもがボタンとドアを閉める音やカバンを机に無造作に置く音で、子どもがざわめきだすことを体験された方も多いただろう。これらはすべて刺激となり、子どもの集中力を削ぎ、注意の転導を引き起こす。このため雑音や私語、ドアの開閉等、なるべく不要な聴覚的刺激を減らすことを念頭に置くことが必要となる。教員の言葉を簡潔にし、聞き取りやすい指示を心がけることも刺激を減らすことにつながる。矢継ぎばやに言葉を発すると、雑音のように感じたり、重要な語句を聞き逃したりすることが多い。

また興奮を下げるための「静寂の時間」（高山他, 2009）を授業中に設定して、クールダウンすることを心がけることも大切である。楽しく興味深い授業を実施すると、興奮するあまり子どもの私語が増えてしまうことが往々にしてある。その際に、大声で私語を制するのではなく、「静寂の時間」を設定して、クールダウンを図るようにすると効果的である。「静寂の時間」とは、私語なしに黙読や視写、レジュメ記入などの作業を行う時間で、興奮を下げるために必要な時間である。

2) 視覚的表示の活用：

吉田が「ASD（自閉スペクトラム症）は一瞬で消えてしまっていてじっくりと確認できない話し言葉より、視覚的なコミュニケーション手段の方が受けとりやすい」（2003）、守屋・山下が「コミュニケーションの障害に対しては、聴覚情報のみでなく視覚的の手がかりで補う工夫が必要」（2015）と述べているように、聴覚的指示を補うための視覚的表示の工夫が必要である。聞き取りが苦手だったり、聴覚過敏のある子どもにとっては、視覚的な表示が学習の助けとなる。また聴覚的短期記憶能力が低かったり、不注意な子どもにとっても、視覚的表示があれば、何回も確認することができる。視覚的表示とは、板書だけでなく、レジュメやパワーポイント、写真などを指し、それらを多角的に工夫する。常時使用する視覚支援のためのカードや矢印なども効果的である。ここでは同時に、刺激の軽減への配慮も重要となる。

3) 具体的指示：

ASDは言語コミュニケーションの障害や想像力の障害から、抽象的な表現を理解することが困難である。「どこで、何をすればいいのかははっきり伝える」、「彼らに指示するときは、ひとつずつ、具体的に教えていくことが大切」（佐々木, 2008）とされており、抽象的なあいまいな指示はわかりにくい。「きちんと書きます」ではなく「枠からはみださないように書く」、「走

らない」ではなく「ゆっくり歩く」、「無理をしない」は「30分に1回は、5分の休憩を取る」など、丁寧に具体的に指示することが大切である。「あと3分で丸つけを終わります」「キーワード5つを丸で囲みます」「28ページを5分で黙読します」などの具体的な指示が有効である。言語能力が高くても、意外と言葉の意味や暗黙の了解が理解できていないことを、常に念頭に置いておくようにする。

4) 見通しを持たせる授業：

「ASDはイメージーション障害のために見通しの立たない状況への不安が強い」（吉田, 2003）とされているように、予定の変更や、経験してないことに初めて取り組むことが苦手である。特に新奇な課題や苦手な課題がいつ終わるのかわからない時に、パニックを起こすことがある。話し合い活動が苦手な子どもが、子ども同士の話し合いの声を雑音と感じて教室を飛び出したり、新しい行事が不安で欠席が続いたりすることも多い。同じことを何回も質問する子どもは、見通しが立たないため不安なのである。活動の始まりと終わりが明確に提示されていること、行事のスケジュールをいつ提出するのか等、具体的な見通しが必要になる。「予定が変更になったらどう対応するのか」、「課題を提出するために、1週間前にすることは何か」、「子どもまつりの3日前に準備するもの」など、前もって見通しを示す必要がある。

5) ルールの徹底：

学習環境全般については、「ルールに則った形式で生活体験ができるよう、環境を整えていく必要がある」（田中・佐藤・高山, 2003）とされているが、これを具体化するため、学期のはじめに学習についてのルールを伝え、明文化することによって枠組みを与える。なぜそのルールが必要であるか、その意味を子どもの特性に合わせた方法で、定着するまで繰り返し説明する。これを、学期毎の授業の最初に伝えることが重要である。最初に伝えることによって、担任が子どもの不適切な行動をどのように「注意する」かが明確になり、授業の見通しを示すことにつながる。途中でルールを加えたり、変更したりすると発達障害のある子どもは混乱し、教師を信頼できなくなることが多い。例えば「授業に関係のない私語は禁止」ならその指導をぶれることなく続けることが大切である。子どもによって私語を寛容に許したり、厳しくしたりするなど基準がぶれると、子ども同士の不公平感を生み、信頼関係が構築できなくなる。また私語なしに取り組む教材やレジュメ、プリントは、何分間続けるのか、自由に意見交流する時間は何分で終わらせるのか等の枠組みを決めておくことも、見通しにつながる。

6) 子どもとの信頼関係の形成：

自己コントロールの抑制に課題がある子どもにとって、身近な大人が信頼できる存在となることは、最も基本的で重要なことである。学習への意欲や気持ちを支えるのは周囲への信頼である。発達障害のある子どもは「学校の中で、信頼できる先輩、先生、さらに学業成績とは関係ない保健室の先生に護ってもらえるような声かけが必要」（田中他, 2003）と述べられているように、教師との信頼関係の構築はすべての学習支援の基本である。

佐藤（2008）は、「どの子どもも受け止められ大切にされている安心感と満足度の高い学級

集団」の中では、友だちに対する許容度は高くなり、「先生に協力しようという先生への信頼感が深まる」と述べている。一人ひとりの子どもが「教師に大切にされている」、「クラスで認められている」という満足感があれば支援の必要な友だちに対する見方は優しくなる。

以上の6つの視点は、障害のある子どもにとっても、障害のない子どもにとっても学びを最大化できる支援である。障害のない子どもも「スケジュール管理」「グループワークへの参加」等、乗り越える課題に変わりはない。例えば、教室の刺激や私語を減らすことは、発達障害のある子どもだけでなく、落ち着いた環境で学びたい子どもにとってもユニバーサルデザインを意識した教育の工夫である。このような視点に基づく研修をいかにすすめていくかが課題としてあげられる。

2. 幼児教育、学校教育におけるビデオを用いた研修

2-1 様々なビデオを用いた研修とその効果

本論文では、教師に対する援助として、幼児教育や学校教育における効果的な研修についての方向性を探ることを目的にしている。

ビデオは記録や再現が容易であり、情感を含めた内容や表情も、音声や映像として画面に映し出されるので理解しやすく、客観的に事実を記録できるという利点があり、授業を記録、検討する方法として有効であると考えられる。また、自己を振り返る方法として、ビデオは客観的に自分の姿を見直せるという良さがあり、自己学習を促進する可能性を持っている。

ビデオを用いた研修のメリットは2点ある。まずビデオという媒体によって、同じ場面を共有できるとともに複数の視点からその場面を捉えることができる点である。次にビデオを記録として残せる点である。文字だけでなく映像を残すことで振り返りができ、さらに当日カンファレンスに参加できなかった教諭・保育士も、後日視聴することも可能になる。そして、その感想や意見を述べることもできる（松久, 2020）

2-2 Before・After ビデオ研修とは

松久（2020）は幼児教育におけるビデオを用いた研修の一つとして、Before・After ビデオ研修を提案した。Before・After ビデオ研修についての質問紙（アンケート）では、「とても効果的」「少し効果的」と答えた人は合わせて約72%で、多くの参加者がBefore・After ビデオ研修が効果的であると肯定的に捉えていることが明らかになった。ただ、幼稚園で撮影したビデオだったため、小中学校の教師にとって効果的だったかどうかは疑問が残った。

そこで、中学校教師も視聴することを想定して小学校高学年の授業を撮影することを計画した。撮影にあたって、Before・After ビデオ研修を実施する際、ユニバーサルデザインの視点と共に、「ハード面」「ソフト面」（松久, 2020）の切り口から討議することも視野に入れた。

2-3 Before・After ビデオ（小学校版）の作成手順

小学校の通常の学級のある場面（朝の会、終わりの会、給食、給食準備中など）のビデオを撮影する。中学校教師も視聴することを想定して、小学校6年生の朝の会で実施している「計算チャレンジ（計チャレ）」の時間を選んで撮影することにした。これを「Before ビデオ」と呼ぶことにする。放課後、全教職員が「ハード面・ソフト面」の視点を踏まえて視聴し、担任の子どもへの関わり方で良かった点、工夫すべき点、改善すべき点等について研修の中で意見を出し合う。それらの意見を踏まえて工夫や改善に取り組み、後日、同じ場面を同じ場所からビデオで撮影する。これを「After ビデオ」と呼ぶことにする。そして放課後、そのAfterビデオを全教職員で視聴し、Beforeビデオと比較しながら、工夫や改善が子どもたちにどのような影響を与えているかについて協議を深める。さらに工夫が必要であれば改善して、ビデオで撮影して協議する…というPDCAサイクルを念頭に置いて研修を進めていく。

このBefore・Afterビデオの撮影時の注意点として、Before・Afterのどちらも①同じ学習場面を撮影する ②教室の同じ場所にビデオカメラを設置する ③Before・Afterビデオの間隔は1～2ヶ月以内が望ましい（特に幼児は、数ヶ月で自然と発達していく可能性がある）。

3. 研究の目的と方法

3-1 目的

幼児教育や学校教育に関わる教師に対する援助として、通常の教育環境における支援の必要な子どもへの手立てについて、ビデオを用いたクラス全体を見据えた研修方法を提案し、その効果について検証する。効果的な研修を進めるにあたっての問題点と課題を明らかにすることを目的としている。

3-2 研究の方法

小学校の通常の学級における一場面をビデオ（Beforeビデオ）に録画し、全教職員で視聴する。その際、支援の必要な子どもたちに有効な手だてが取られているかどうかを、特別支援教育のハード面・ソフト面の観点から討議する。その討議の内容を踏まえて工夫・改善し、後日（約2ヶ月後）同じ場面をビデオ（afterビデオ）に録画する。子どもたちの変容を見ながら、手だてが有効であったか評価し、またさらに工夫・改善すべき点について検討し、さらなる改善に取り組むという研修方法である。

市町村教育委員会が実施する筆者担当の特別支援教育の研修会において、短く編集して字幕を挿入したbeforeビデオ・afterビデオを視聴し、研修に参加した教職員にビデオ研修を疑似体験していただき、そのビデオ研修が効果的であったかどうかについて、質問紙調査を実施した。質問紙調査では、対象者の「年齢」「勤務場所」「現在の職種」「経験年数」「特別支援教育の経験年数」を基礎的情報として尋ねた。次にBeforeビデオを視聴後「工夫したり改善したりした方がいいところ、また良かったところや評価できるところ」について自由記述の欄を

設けた。そして、After ビデオについても同様に自由記述欄を設けた。最後にビデオ研修の効果についての選択肢による評価、その理由などについて自由記述での回答をお願いした。さらなる改善につなげることを念頭において、評価の理由を分析する。

3-3 研究対象者及び期間

筆者が研修講師を務めた教育委員会主催の研修会で、教職員を対象に実施した。質問紙は20XX年4月～8月に実施し、アンケートの分析は、20XX年6月～8月に行った。対象者は、83名であった。

3-4 研究倫理

市町村教育委員会もしくは研修担当者に研究依頼を行い、承諾を得た後、研修会に参加した教職員に主旨を説明し、質問紙を実施した。その際、研究に参加しないことによって不利益を被ることがないこと、質問紙は無記名で所属名が特定されるおそれがないこと、回収された質問紙は厳重に保管され、研究終了後は裁断破棄することを、説明した。

発表に際しては、研究協力者の人権、プライバシー、個人情報の保護に十分に配慮し、個人が特定できるような情報は載せないことを約束した。なお本研究は、大学の倫理審査を受け、研究遂行の承認を得て実施している。(承認番号 217006)

4. 結果

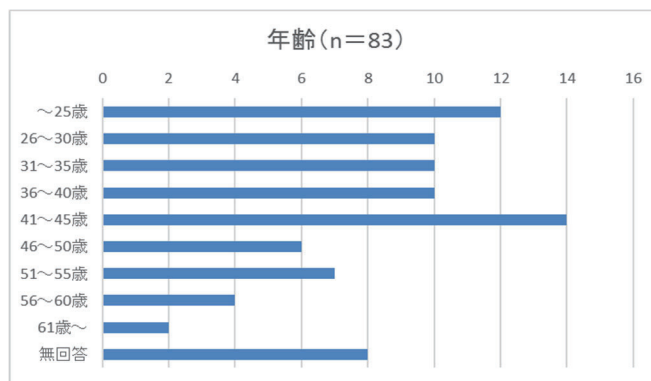
4-1 調査対象者の基礎的情報について

質問紙は90通配付し、そのうち回収したのは83通であった(回収率92.2%)。その内訳は以下のとおりである。

男女の割合は、男性が28名(34.0%)、女性が47名(57.0%)、無回答が8名(10.1%)で、女性の占める割合が男性の約1.7倍だった。

表1 対象者の年齢 (n=83)

年齢	n	%
～25歳	12	14.5%
26～30歳	10	12.0%
31～35歳	10	12.0%
36～40歳	10	12.0%
41～45歳	14	16.9%
46～50歳	6	7.2%
51～55歳	7	8.4%
56～60歳	4	4.8%
61歳～	2	2.4%
無回答	8	9.6%



年齢別の内訳は、25歳以下が12名

(14.5%)、26～30歳が10名(12.0%)、31～35歳が10名(12.0%)、36～40歳が10名

(12.0%)、41～45歳が14名(16.9%)であり、回答者はほぼ各年齢層にわたっている。46

歳以上の教員は19人で全体の22.9%で、小学校、幼稚園とも若年層の教員が増えていることがわかる（表1）。対象者の勤務場所は、大阪府と兵庫県だった。対象者の現在の勤務校園は、小学校が63人（75.9%）、幼稚園20人（24.1%）であった。

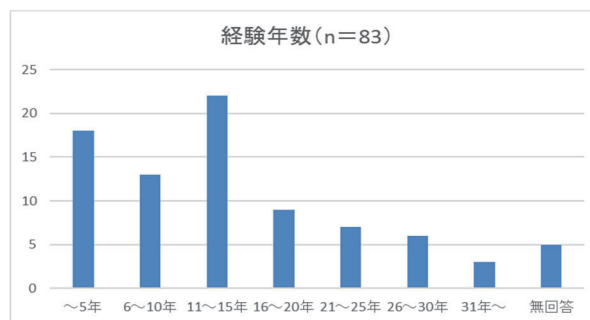
表2 現在の職種別の内訳（n=83）

職種	n	%
通常の学級担任	47	56.6%
特別支援学級担任	14	16.9%
教務主任	1	1.2%
指導教諭・首席	1	1.2%
管理職	4	5.0%
専科	5	6.0%
養護教諭	0	0.0%
カウンセラー	0	0.0%
その他	6	7.2%
無回答	5	6.0%

現在の職種別の内訳は、通常の学級担任が47人（56.6%）、特別支援学級担任が14人（16.9%）ついで専科5人（6.0%）、管理職4人（5.0%）等であった（表2）。現在の職種の経験年数は、11～15年22人（26.5%）で一番割合が高い。ついで5年までが18人（21.7%）、6～10年13人（15.7%）となっている。15年までの経験年数が短い教員が53人と多く、約64%を占めている（表3）。

表3 経験年数（n=83）

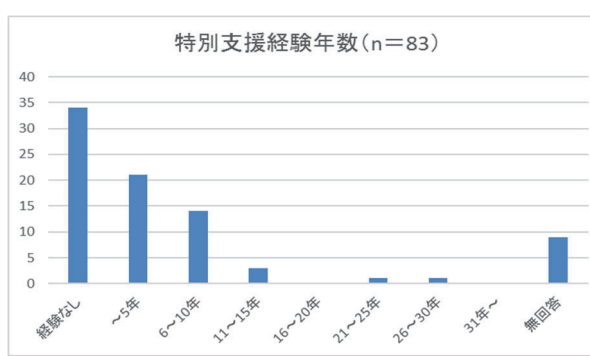
経験年数	n	%
～5年	18	21.7%
6～10年	13	15.7%
11～15年	22	26.5%
16～20年	9	10.8%
21～25年	7	8.4%
26～30年	6	7.2%
31年～	3	3.6%
無回答	5	6.0%



障害児担当、特別支援学級の経験年数では、経験なしが34人（40.9%）、5年までは21人（25.3%）、6～10年14人（16.9%）で、合わせると83%になり、10年までの特別支援担当経験者がほとんどである（表4）。

4 障害児担当・特別支援学級での経験年数（n=83）

特別支援経験	n	%
経験なし	34	40.9%
～5年	21	25.3%
6～10年	14	16.9%
11～15年	3	3.6%
16～20年	0	0.0%
21～25年	1	1.2%
26～30年	1	1.2%
31年～	0	0.0%
無回答	9	10.8%



以上から、質問紙に回答した対象者は、女性が多く（57.0%）、45歳以下の幼稚園教諭・教員がほとんどである。また現在の職種の勤務年数は、15年以内が64%を占め、特別支援の経

験者は、経験なしを含め10年以内の経験者（83%）がほとんどである。

4-2 Before・After ビデオ研修後に実施した質問紙調査の自由記述の結果

Before ビデオ、After ビデオのそれぞれを視聴したあと、質問紙の「Before ビデオの工夫・改善すべき点、良いところや評価すべき点」、「After ビデオの工夫・改善すべき点、良いところや評価すべき点」について自由記述をお願いした。以下にまとめる。

【Before ビデオの工夫・改善すべき点、良いところや評価すべき点】

Before ビデオ	
工夫したり改善したりした方がいいところ	良かったところや評価できるところ
<ul style="list-style-type: none"> ・（授業の）スタートが揃っていない ・同じ指示を同じトーンで何回か出している ・バラバラと立ち歩いて、前にプリントを持ってくる ・教師が関係ない内容の指示している（体温、帽子など） ・残り時間を提示するとわかりやすい ・おしゃべりが多い ・先生もしゃべらない ・「口を閉じて」と言うが、静かにする工夫がされていない ・ルールが徹底されていない ・視覚的掲示があればいい ・全体の活動がバラバラになっている ・1番前の子どもにサポートできていない ・机上が整理できていない ・教師が全体に視線を送っていない ・教師の言葉づかいが命令口調 ・いったん静かにさせてから、指示を出す ・個別の声かけは側に行って声をかける ・チャイムで切り替えができていない ・黒板の上に紙が置いてある ・「ハ～」とため息をついている ・良い行動を誉める 	<ul style="list-style-type: none"> ・遅刻した児童に「帰っておいでや」と声をかけている ・声かけが優しい ・子ども同士がフレンドリーである ・終わりの指示がある（あと〇分） ・早く終わった子どもが、読書していた ・半数ぐらいの子どもは、集中していた ・前面の掲示が少ない ・怒鳴らず我慢強い

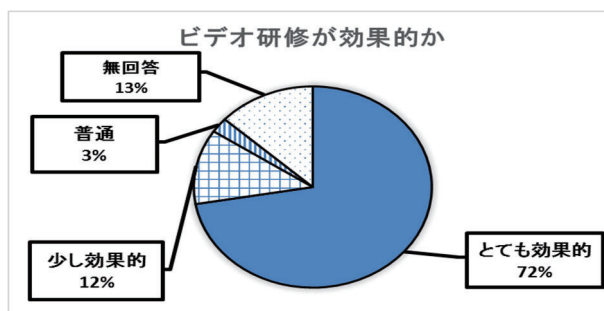
【After ビデオの工夫・改善すべき点、良いところや評価すべき点】

After ビデオ	
工夫したり改善したりした方がいいところ	良かったところや評価できるところ
<ul style="list-style-type: none"> ・もう少し誉める方がいい ・言葉づかいに丁寧にする ・子どもを前に呼ぶのではなくて、教師が机間指導する方がいい ・タイマーの終わりの音が大きい ・遅刻する児童が多い ・黒板に書くことは、カードにすれ ばよい ・黒板のチョークの音が気になる 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業内容や流れが、黒板に視覚提示されている ・先に始めた子どもが、モデルになっている ・静かで穏やかな時間が保たれている ・静かな雰囲気づくりができています ・子どもの集中力が向上している ・遅れた子どもに静かに声をかけている ・何をするか明確になっている ・指示が短い ・ジェスチャーや非言語が増え、教室全体が静か ・教師の声のトーンが下がり毅然としていた ・最後にまとめて、体温チェックをしている ・教師の言葉が少ない ・プリントがケースに収納されていて、場所がわかりやすい ・机上が整理整頓されている ・わからない時は黒板を見ることが習慣になっている ・「静かに」と言わずに、カードで指示している ・遅刻した子どもへの対応を非言語やジェスチャーで行い、必要最低限である ・子どもの移動が少ない（ランドセルはいったん机の横に置くなど）

「今回のようなビデオ研修は、学級づくりの研修として効果的だと思いますか」という問いについて「とても効果的」「少し効果的」「普通」「あまり効果的ではない」「効果はない」の5件法で、対象者に評価をお願いした（表5）。「とても効果的」は60人（72.3%）、「少し効果的」10人（12.0%）であった。「効果はない」「あまり効果的ではない」はともに0人だった。無回答が11人（13.2%）であった。「とても効果的」「少し効果的」を合わせると84.3%になり、多くの教員が、ビデオ研修が効果的であると、肯定的に捉えていることがわかる。

表5 今回のようなビデオ研修は、学級づくりの研修として効果的だと思うか

効果	n	%
とても効果的	60	72.3%
少し効果的	10	12.0%
普通	2	2.4%
あまり効果的ではない	0	0.0%
効果はない	0	0.0%
無回答	11	13.2%



以下、「とても効果的」「少し効果的」と

答えた理由についての自由記述を記載している。複数回答が可能で、()内は同様の意見を述べた対象者数である。

- ・静寂の時間の大切さが、視聴してよく理解できた。
- ・時期をずらして、同じ場面を撮影するので、違いが明らかになった。(2)
- ・自分のクラスの子どもの様子や自分の立ち居振る舞いを客観的に見ることができる。(15)
- ・他の先生からの意見やアドバイスを聞くことができる。(4)
- ・なかなか授業ではできないが、計算チャレンジなら Before・After と改善して、もう一度同じことに取り組めるのが良い。(5)
- ・教師自身の問題点を把握することができる。(3)
- ・担任の困っていることが、ビデオを見るとよくわかり共感できる。(8)
- ・事例研よりビデオの方が、周りの教師が意見を出しやすい。(4)
- ・言葉かけや声の大きさ、言葉を減らしてジャスチャーやアイコンタクトを活用しているのが、よくわかった。
- ・教師の声かけや指示を見なおすことができ、とても効果的である。(3)
- ・自分が子どもたちに与えている刺激に気づいて、反省した。教師の声が聞こえないだけで、子どもたちも静かになることがわかった。After ビデオでは、教室の雰囲気が落ち着いていた。
- ・タイマーやスケジュールの提示などがあれば、教師の指示が減ることがわかった。
- ・自分の気がつかないことやクセを知ることができるので、改善につながる。(2)
- ・周りの教師から、プラスの評価をもらうことで、やる気が出る。(3)
- ・教師が学び続ける(変わり続ける)ことが必要なので、自分自身を振り返る大きな効果がある。
- ・日常的な場面なので気づいていないことが多いが、ビデオは具体的なので振り返りやすい。
- ・ビデオを見てこんなにも落ち着くのかと、ソフト面・ハード面を整える必要性が理解できた。
- ・これほど変わるのであれば、取り組むメリットを感じた。
- ・After ビデオを見て、ソフト面の大切さを知り、今後の意識改革につなげやすかった。(2)
- ・ビデオを視聴して、ソフト面の取り組みの中で「自分も使える」と思う取り組みがあった。
- ・教師が「子どもを育てる力」を考える良い機会になる。
- ・ビデオを見ることでイメージしやすく、具体的な取り組みを考えやすい。(5)
- ・言葉で聞くより「百聞は一見にしかず」である。説得力があった。
- ・新任の先生のクラスに、ベテランの先生が来て子どもが落ち着くことがあるが、このようにビデオで見る方がよくわかると思った。
- ・学校全体で研修することによって、全員が同じ目標を目指すことができる。(3)

【自由記述「とても効果的」「少し効果的」と答えた理由】

「効果はない」「あまり効果的ではない」が0人だったので、ネガティブな自由記述はなかった。ただ「少し効果的」の自由記述の中に「改善であっても、急にたくさんのが変わるのは子どもが戸惑うのではないかと思った」という意見があった。

5. 考察

本論文の Before・After ビデオ（小学校版）では、前述した「ハード面」「ソフト面」の観点からも分析した。授業におけるハード面とは「視覚支援」「スケジュールの提示」「見通し」「構造化」などの環境整備である。ソフト面とは「ほめ方」「叱り方」「話し方」「わかりやすい指示の出し方」「目線の送り方」等、そして「教諭・保育士が子どもたちに信頼・尊敬されているか」という主に教師の立ち居振る舞いやスキルである。Before ビデオと After ビデオを比較して、ハード面、ソフト面の観点から工夫したことについて、以下にまとめた。

【After ビデオにおけるハード面・ソフト面の変化】

Before ビデオ→After ビデオにおけるハード面・ソフト面の変化	
ハード面	ソフト面
<ul style="list-style-type: none"> ・黒板に「計算チャレンジ（計チャレ）」のタイムスケジュールを提示 ・タイマーを黒板に貼り付けることで、教師の「あと〇分」をいうセリフを減らす ・「静かに」のカード ・教室の入口に「体温カード」を入れるカゴを設置 ・計チャレの時に、ランドセルをどこに置か明確に指示 ・プリントを収納する整理ケースを設置 ・「体温」については、計チャレ終了後に確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・「体温」「水筒」など刺激になる教師の声が増える ・登校時から教室が、静かに学習しようという雰囲気になっている ・セリフではなく、ジェスチャーやアイコンタクトなどの非言語で指示を出す ・教師の指示が短く、簡潔 ・声のトーンが命令口調でなく穏やか ・遅刻児童には、視覚支援やジェスチャーで対応する ・静かに取り組み、集中力がアップしている

対象者にも、どれがハード面かソフト面かについて討議していただいた。討議する中で、ハード面とソフト面が車の両輪の様に機能することによって、After ビデオに大きな変化が見られたことを確認した。

また、その中で After ビデオを視聴して、さらなる改善点が提案された。例えば「タイマーの終了音が大きく、刺激になっている」「質問児童に対して黒板で丁寧に指導しているが、チョークで書く音が気になる」「黒板の周りの掲示物を減らす」「質問児童が、教卓のところへ来るのではなく、教師が机間指導する方がいい」「誉める言葉を増やす」などの改善点があげられた。Before・After ビデオは、PDCA サイクルを念頭において提案した研修方法である。このように、同じ場面を撮影することによって、次の改善へと繋いでいくことができる。

6. 総合考察と課題

小畑・三浦（2021）は「動画撮影することにより、授業者である自分自身を客観的に捉えている」「自身の発声、表情、動作などを客観的に見ることができる」「繰り返し視聴できる」と、教育におけるビデオの効果について述べている。また、「記録や再現が容易であり、客観的に事実を記録できるという利点」（富田, 1999）、「自分を見なおすことによってポジティブな

変化が見られた」(田中他, 1987) 等と多くの先行論文でも、ビデオの効果について述べられているところである。

また、調査対象者の基礎的情報から、45歳以下の幼稚園教諭・教員がほとんどで、勤務年数も15年以内が6割以上を占めることがわかった。これは昨今教育現場で課題になっている、若年層教員の増加を表していると考えられる。また特別支援の経験も10年以内の経験者がほとんどである。それは、文部科学省(2016)が3年毎に実施している「学校教員統計調査」からも読み取れる。ベテラン教員が退職し、先輩教員との交流の中で自然と引き継がれることやベテランの良質な授業を見る機会も激減している。その中で、従来のように研究大会で実施される授業を参観するという研修方法ではなく、新たな研修方法を模索する必要がある。さまざまな経験を通し、子どもの変容を肌で感じ、教師としてのやりがいを感じとることが大切になってくる。

Before・Afterビデオ研修は、従来のビデオ研修の効果に加えて、子どもの変容を実感するという効果がある。Beforeビデオを撮影後、工夫・改善について協議した後、同じ場面を後日Afterビデオとして撮影し、その効果を比較することに特徴がある。幼稚園におけるBefore・Afterビデオの検証(松久, 2020)に続いて、小学校におけるビデオを作成してその効果を検証した。

対象者に評価をお願いしたところ、「効果はない」「あまり効果的ではない」は0人であった。無回答を除いた割合を求めてみると「とても効果的」「少し効果的」と答えた人は、無回答を覗くと、合わせて97.5%となった。多くの教員がBefore・Afterビデオ研修が効果的であると肯定的に捉えていることが明らかになった。

対象者の自由記述にも「時期をずらして同じ場面を撮影するので、違いが明らかになった」「Before・Afterと改善して、もう一度同じことに取り組めるのが良い」「これほど変わるのであれば、取り組むメリットを感じた」というBefore・Afterビデオならではのメリットが挙げられている。また「教師が学び続ける(変わり続ける)ことが必要なので、自分自身を振り返る大きな効果がある」など、この研修が継続したPDCAサイクルの研修になり得ることも示唆された。

ハード面・ソフト面の観点からも「ビデオを見てこんなにも落ち着くのかと、ソフト面・ハード面を整える必要性が理解できた」「Afterビデオを見て、ソフト面の大切さを知り、今後の意識改革につなげやすかった」「ビデオを視聴して、ソフト面の取り組みの中で『自分も使える』と思う取り組みがあった」と自由記述にも述べられていた。

筆者はこれまで数々の研修会で「ハード面・ソフト面の両立」の大切さについて述べてきたが、口頭だけでは伝わりにくいと感じていた。このBefore・Afterビデオを研修参加者に視聴していただくことによって、研修の深まりを感じることができた。また、参加者も自分の学校現場で、新しい研修の形としてBefore・Afterビデオの研修に取り組んでみたいと言う意欲が芽生えているように感じた。

ただ、課題としてビデオの製作に時間がかかることを挙げておく。学校現場では、撮影した映像をそのまま視聴するが、研修会で使用する場合は編集が必要になる。筆者は今まで幼稚園においては「朝の会」「終わりの会」「お誕生日プレゼント作成場面」、小学校においては「計算チャレンジ」「新出漢字指導場面」についてビデオを作成した。研修に使うならば、Before・After ビデオの合計視聴時間が1時間超えるとなれば、かなり現実的ではない。そのため、毎回短く編集して字幕を入れたビデオを作成しているが、この編集に時間がかかるのが課題の一つである。またもう1点、研修会ではハード面・ソフト面について参加者が討議し、筆者がそれを分析する流れにしている。幼児教育や学校教育現場の研修では、指導助言できる人が必ずいるとは考えられない。そうすると、お互いに分析できる力量が試されることになる。そのためにも、普段からハード面・ソフト面を意識したユニバーサルデザインの授業作りや学級運営に力を注ぐ必要がある。

筆者が提案した Before・After ビデオ研修が、支援の必要な子どもたちのためのユニバーサルデザインを意識した学級集団を構築する力に繋がることを、願っている。

謝辞

本研究の実施にあたり、お忙しい中、調査にご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

<参考・引用文献>

河村茂雄・武蔵由佳 (2005). 学級担任の特別支援教育 個別支援と一斉指導を一体化する学級経営 図書文化社, p. 16, p. 40, p. 47.

松久真実 (2020) 幼児教育における子ども理解を深める教師・保育者に対する援助ー支援の必要な子どもの育ちがみえる保育現場の試みー, 桃山学院教育大学研究紀要 2020

守屋國光・山下光 (2015). 守屋國光編. 特別支援教育総論ー歴史、心理・生理、教育課程・指導法、検査法ー 風間書房, pp. 293-312.

文部科学省 (2016) . 学校教員統計調査

(https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kyouin/kekka/k_detail/1395309.htm) 2022年11月20日

小畑千尋・三浦秋司 (2021) : 小学校教育養成における音楽科の授業動画制作で培われる資質・能力ー新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う遠隔授業での附属小との連携による試みー, 宮城教育大学紀要, 161-171

佐藤慎二 (2008). 通常学級の特別支援今日からできる! 40の提案 日本文化科学社 p. 58.

佐藤慎二・深澤恭子 (2010). 通常学級の授業ユニバーサルデザイン「特別」ではない支援教育のために 全日本特別支援教育研究連盟 (編) 日本文化科学社, p. 2, p. 9, p. 11.

佐々木正美 (2008). アスペルガー症候群 (高機能自閉症) の子どもを育てる本 (学校編) 講談社, p. 71.

高山恵子編・松久真実・米田和子著 (2009). 発達障害の子どもとあったかクラスづくりー通常の学級で無理なくできるユニバーサルデザインー 明治図書出版

田中康雄・佐藤久夫・高山恵子 (2003). えじそんブックレット えじそんくらぶ p. 23.

鳥居深雪 (2009). 脳からわかる発達障害—子どもたちの生きづらさを理解するために

山岡 修・宮崎英憲 (2008). 特別支援教育が目指す姿は教育のユニバーサルデザイン化である (特別支援教育の実践研究会編) 特別支援教育の実践情報 明治図書, 124, pp. 6-7.

吉田友子 (2003). 高機能自閉症・アスペルガー症候群「その子らしさ」を生かす子育て 中央法規, p. 101, p. 125.

Ronald Mace (1985). Universal Design: BarrierFree Environments for Everyone. Designers west. 33(1). 147-152.

Improving lessons in early childhood education and school education with an
awareness of universal design
—Developing new techniques from the perspective of special education—

MATSUHIRA Manami

Abstract

In early childhood education and school education, there is a great deal of interest in understanding how to provide support and manage regular classes for children with special needs, including children with developmental disabilities. In video footage of classrooms with teachers who conducted classes with a universal perspective, we observed changes in children. Furthermore, we were able to use this footage in training for future classes.

To evaluate the effectiveness of the training, a questionnaire survey was conducted for participants who watched “before” and “after” videos at the special needs education training held by the municipal board of education. In summary, with regard to support for all children, including children with disabilities in regular classes, we propose training methods that consider each class and the entire school from a universal perspective.

Keyword: universal design video training children in need

In early childhood education and school education, there is a great deal of interest in understanding how to provide support and manage regular classes for children with special needs, including children with developmental disabilities. In video footage of classrooms with teachers who conducted classes with a universal perspective, we observed changes in children, and furthermore, we were able to use this footage in training for future classes.

To evaluate the effectiveness of the training, a questionnaire survey was conducted for participants who watched “before” and “after” videos at the special needs education training held by the municipal board of education. In summary, with regard to support for all children, including children with disabilities in regular classes, we propose training methods that consider each class and the entire school from a universal perspective.